

佳作

夏の試練

静岡県 静岡県立韮山高等学校一年 川口 真弥

ああ、あとどれくらい登り続けられよう……。周囲は霧に覆われ、遠くが見えない。普段のトレーニングよりも重いザックを背負い、まだ自分の足に馴染んでいない登山靴を履きひたすら、登る。山を登っている最中は弱音を吐かない、と心に決めてはいたものの、息は上がり、脚はズキズキと痛み、心は折れかかっていた。あと少し、あと少しと自分で自分を励ましながら登っていると、ちらほらと鮮やかなテントが見えてきた。あそこが今晚私たちが泊まるテント場だ。ついにここまで来たのか。先輩の「あともう少しだよ！」という言葉に支えられ、山小屋に至る、段差の高い階段を一段一段登った。先に階段を登りきった仲間が「わあ、凄い！」と声を上げていた。半ば期待していなかった私は、それほどきれいなのだろうか、と疑問を抱えながら最後の一段を登り切った。刹那視界が、開け、目の前の全てのものが目に飛び込んできた。全てのもの、といっても、空と雲と連なる山々だけなのだが。どこまでも広がる真っ青な空

疲れや苦勞が吹き飛ぶ、ということ、今まで何度も聞いたことがあった。でも、それを実際に経験したことはほとんどなくて、いつもわだかまりがあった。ところが今回、その感覚を味わうことができた。長時間の急な登りに加え、重い荷物や暑さで肉体的にも精神的にもハードだった道のり。それを乗り越えたからこそ得られたもの。景色の美しさに対する感動だけでなく、それらのことを考えたときに込み上げてきたものによって、疲れは和らぎ、不覚にも涙がこぼれそうになった。

二日目に登頂した山が、つばくだけ燕岳なのだが、そこから見えた槍ヶ岳は、予想よりも遙かに遠く、小さかった。槍ヶ岳は四日目に登頂予定だったのだが、あと二日で辿り着くのだろうか、と途方に暮れ、不安が押し寄せてきた。しかし、四日目に槍ヶ岳の頂上を踏んだとき、その不安は不要だったのだと分かった。歩き続けることはしんどかったし、上を目指さなければいけないのに、登山道の関係で、何度も下らなければならなかった。でも、歩けば歩くほど、槍ヶ岳は近づき、後ろを振り返ると朝出発した山小屋が彼方遠くに見え、歩いてきた登山道の白い筋もうっすら見えた。自然は壮大で、人間を圧倒するほどの力もあるけれど、自然に対してちっぽけな私たち人間の、果敢に立ち向かう強さと可能性を感じられた。不可能に見えることでも、小さな積み重ねで可能になる。感覚的にも、視覚的にも実感でき、少しだけ自分に自信

の下に、険しく、そして凛々しくそびえる深緑の山々。自然が作り出す景色がこんなにも美しかったなんて……。思わず息を飲んだ。これが四泊五日で行われた夏山合宿の二日目の出来事である。

私は山岳部に所属している。山岳部には月に一度の月例山行というものがあり、これまでに登った山は、沼津アルプスと丹沢の山々のみで、いずれも標高は三百五十六メートル、千七百七十七メートルと低い。八月七日からの夏山合宿では三千百八十メートル―日本で標高が第五位の槍ヶ岳を目指し、北アルプスを縦走する、という極めて過酷な合宿だったため、経験値が低い私は、楽しみな気持ちよりも、不安の方が断然大きかった。振り返ってみれば、あつという間だった夏山合宿だが、そこで見た景色はどれも鮮明に覚えている。特に二日目に見たあの景色は、私に強烈な感動を残した。体力がない私は、仲間についていくことに精一杯で、常に足下を見て無我夢中で歩き続けた。故に周りの景色を見る余裕がなかったし、霧や木が視界を遮っていたのもあって、途中、ほとんど景色を見ることがなかった。だから山小屋に着いたときに見たのは生まれて初めての、標高二千メートル級の地点からの眺めだったのだ。眼下に広がる空と山は壮大で、限りがなかった。こんな場所が日本にあったのかと本気で思った。美しいものを見たり、おいしいものを食べたり、目的が果たされたりすると、それまでの

が持てた。

今回の合宿では、非日常の環境の中で、様々なことを視て考えることができた。とても貴重な経験ができたと思う。これからも、私は山岳部員として、どんなに苦しくても、山に登り続けようと思う。山に感謝。